



株式会社イトーキ 滋賀工場 [その他の製造業]

当社は「人が主役の環境づくり」をテーマに地球環境の問題はもちろん、誰もが使いやすい「ユニバーサルデザイン」という考え方を着目し、1999年からユニバーサルデザインとエコデザインという2つの考え方を融合させた「Ud&Eco style (ユーデコスタイル)」というコンセプトを打ち出しました。製品の企画から設計、販売、生産にいたる各段階で、UDとECOの両面から評価を行い製品づくりを行っています。

品質・環境管理部

【施設DATA】

所在地：滋賀県近江八幡市上田町 72

事業概要：収納キャビネット、全自動貸金庫、オフィス用小型自動倉庫、入室管理システム等のセキュリティ機器、物流市場向けの立体高速仕分機、事務・会議用チェアの製造

電話番号：0748-38-0951

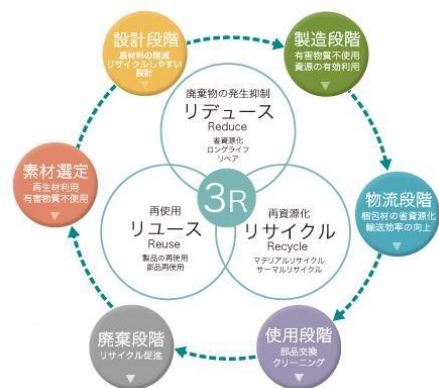
URL：<http://www.itoki.jp>

■全社ゼロエミッションを目指して

当社は、明治23年に創業して以来、「社会への貢献と旺盛な開拓精神」の志を常に持ち、オフィス環境の向上をモノづくりの観点から提案してきました。

滋賀事業所は、2005年に組織統合による新たなスタートを機に、従来からのキャビネット工場、電子機器工場、チェア工場の3工場に加え、物流センターが新設され、よりパワーアップした生産と物流の総合拠点として活動しています。各工場では主に収納キャビネット、全自動貸金庫、オフィス用小型自動倉庫、入室管理システム等のセキュリティ機器、物流市場向けの立体高速仕分機、事務・会議用チェアの製造をしています。

2005年に全社でISO14001を取得し、環境方針に基づく環境中期計画に従い、活動を行っています。当社のゼロエミッションの取り組みは、産業廃棄物のリサイクル率99%以上をゼロエミッションの定義とし、2002年の寝屋川工場での達成後、本社、滋賀工場と続き2008年度までには、生産全8拠点で達成することを目標にしています。今後は、生産拠点に限らずオフィスや物流センターも含め、全社でゼロエミッションの取り組みを推進していく予定です。



■「Ud&Eco プロダクト」化の推進をかかげて

当社の企業コンセプト「Ud&Eco style」とは、地球環境と人間環境に配慮した持続な社会の実現を目指すことであり、限りある資源の有効活用のために設計、製造、物流に至るすべての事業プロセスを通して、環境負荷の少ない製品作りを行っています。

○材料の省資源化

チェアの中板にスリットを入れてクッション性を高める構造により、クッションのウレタンを従来の約1/2の厚さ、重量にして約1/4に抑えています。

○分別しやすさへの配慮設計

廃棄する時に素材ごとにリサイクルできる設計を優先的に採用しています。具体的には、チェアのボルトレス化の推進により、ネジの使用箇所が従来品の半分以下になりました。

○リサイクルしやすい素材

スチール、アルミなどの金属や、ポリエチレン、ポリプロピレンなどのオレフィン系樹脂を積極的に使用しています。また樹脂パーツには、廃棄時の分別やリサイクルがしやすいように、パーツごとに材質表示をしています。

○再生樹脂

廃棄された車のバッテリーケース、バンパーやダッシュボードなどの樹脂部品を、チェアの芯材や操作レバー、カバー部品などに使用する他、使用済み PET ボトルを原料にした再生ポリエステル繊維を、チェア、ローパーティション、デスクパネルなどの張地に使用しています。



フロートベンディングシート



■生産活動での3R活動

○製造工程から出る廃材の有効利用

滋賀工場では、汚泥をセメント原料や路盤材にマテリアルリサイクルを行っています。廃プラスチック類はサーマルリサイクルのほか、pp、peなどは材質ごとに分別、粉碎加工後、再生ペレットやハンガーなどにマテリアルリサイクルを行っています。

チェアの生産工程で発生したプラスチックの廃材（スプール・ランナー）は社内で粉碎し、樹脂材料に戻して再利用しています。



○梱包の改善による廃棄物の削減

生産工程からの廃棄物で多くを占めるのが梱包材です。そこで、調達先との協力のもと、品質を損なわない範囲で「梱包材の簡素化」「個別梱包から集合梱包への切替え」「通函(かよいばこ)方式の採用」を図っています。

また、コイル(広幅鋼帯)の梱包を、調達先企業の協力を得て裸仕様に変更しました。

その他、チェアで使用する生地の手端材は、ウエスとして再利用に回したり、軍手は洗濯して何回も使用するようする等小さな取り組みもコツコツと取り組むようにしています。

■分別は知識と意欲

「マテリアルリサイクル」と「サーマルリサイクル」リサイクルは大きく分けてこの2つの手法がありますが、どこまで燃やさずに再利用できるか、私たちはマテリアルリサイクルの比率を上げる努力をしています。マテリアルリサイクルするには、とにかく細かな分別が必要なため、従業員には細かな素材への知識を持ってもらい、全員参加の協力が必要になります。その為には、繰り返しの教育と、誰にでもわかりやすいルールづくりが重要なカギを握っています。滋賀工場では、外国人スタッフもいますので、目で見えてすぐにわかるよう、13種類のオリジナルマークを作りごみ箱に設置しています。また教育も、ただ「分別してください」とお願いするだけでなく、事務所や現場で実際のゴミ箱を開けてもらい、資源化できるものがないか皆さんで考えてもらいます。コストの話を出すこともあります。こうすることにより、そもそもなぜ分別をしなければならないのか、自ら考えて自発的な分別の習慣をつけてもらうことが狙いです。



オリジナルリサイクルマーク



分別



分別パトロール



教育の一例

滋賀工場は、2006年にゼロエミッションを達成して現在も継続的に活動を行っていますが、一般廃棄物のリサイクル化の課題も残っています。今後も継続的に改善をしながら、さらに上を目指して取り組んでいきたいと考えています。